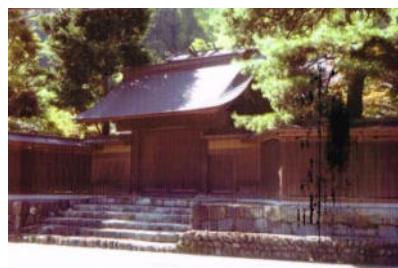


## —檜原村の本宿探訪— (5)

(記 岡本)

会報9月号用の随想「檜原村の本宿(橋橋、口留番所)」を書き上げたものの、橋橋と口留番所木戸の手持写真がない。そこで8月7日猛暑日の中、本宿を訪れた。これまで本宿には少なくとも4回は立ち寄っているが、通過するだけだった。

五日市駅前よりバスで20分、本宿役場前バス停で下車すると、そこは吉野邸正門を少し外した屋敷前である。吉野家は檜原村の歴代名主と口留番所の役人を任された名家である。門や塀は落ち着いた鈍色(にびいろ)で見越しの松が植っている。神社の家柄なのか、見間違いなのか、正面の門の上に見える母屋の屋根には、千木、鯉木らしきものが装飾されている。敷地内には母屋、蔵の他に復元された郷倉(ごうくら、凶作に備え稗を備蓄)がある。名主の広大な邸宅である。



道路を挟んで吉野邸の真向かいに、復元された口留番所の木戸がある。番所に係るものは他に何も無いが、傍に、自然石の板石に刻んだ、背丈5尺程の「檜原村小学校跡」、「檜原小学校創立百周年記念碑」が並んで立っている。明治7年に本校1に分校6の体制で村の学校教育が始まった。本校「檜原学校」(後、檜原尋常小学校)は当初寺子屋のある吉祥寺を仮校舎とした。村内の6分校の名前は、克明、誠意、正心、共励、丁丁、包蒙であった。明治政府の新教育への意気込みが感じられて頼もしい。

午前中なのに、何にせよ暑い。先ず一息入れるために、村役場の建物内にある「カフェせせらぎ」に寄った。何年も前にバス待ち時間に立ち寄って食べたチーズケーキの美味さが忘れられなかったからだ。役場の建物は外壁修理のため足場で覆われている。チーズケーキは店の手作りで、相変わらず頬っぺたが落ちるほど美味しい。家を出る前に、この店のチーズケーキの話を家族にしたら、食べたいという。店主の翁に家苞(いえづと)に包んでほしいと求めると、持ち帰ると味が落ちるのでできないと丁重に謝絶されてしまった。秋川(南北秋川の合流後)に面した窓際に勿論席を取った。窓は閉じられているが、個々の石の彩りさえ識別できる程の清流の故か、サラサラと瀬音が聞こえてくるような錯覚に囚われる。因みに、自家製レアチーズケーキセット(コーヒー付)は650円である。

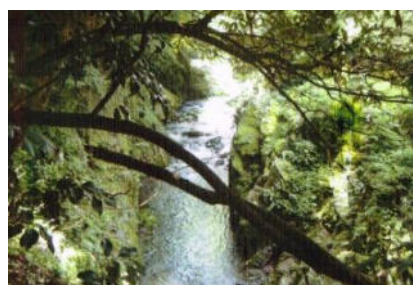
吉野邸の西側に橋橋が南秋川に架かっている。欄干と川面との隔たりは大きい。何メートルあるのか。両岸が懸崖をなし樹木が張り出しているからか、覗き込むと目が眩む気がする。吉野邸の西側の塀と橋詰の間にある、壁沿いの幅70センチ程の苔むした石段を降る。50段程降ると小さな稻荷大明神の祠がひっそりと建っている。10センチ程の瀬戸物の狐が祠一杯に飾り付けられている。祠の背後は、南秋川の溪流に落ちている。真夏の樹木が鬱閉して視界が限られ、溪谷の全体は見渡せない。身を乗り出して枝葉の隙間から沸る急湍と懸崖の岩肌を少し覗くことができた。薄暗い空間に幾条かの光線が差し込んでいる。神秘的である。祠を祀ったのも頷ける。祠の裏から先には行けない。右手上方からは、橋橋の橋脚が圧するように迫っている。

橘橋を西側に渡ると、橘橋の信号がある。橋を渡った正面の路傍の一隅に庚申塔や三界萬霊塔更に金精さまが無造作に並んでいる。信号の三叉路を右に行くと北秋川沿いに藤倉に、左に行くと南秋川沿いに数馬に至る。西の袂の信号横に二階建ての小じんまりした旅館「橋本旅館」がある。引戸の入口脇に高さ 1.5 メートル程の板に陽刻されて白く塗られた旅館名の看板が掛かっている。斑雪のように崩れた白色が旅館の年季を感じさせる。営業開始は明治 10 年と古い。田部重治(注)が好んで利用し旅館の主人らと人間的交わりを深めたところである。田部がもう一つ好んで宿泊した旅館、数馬の「山崎屋」(廃業)を追って訪ねてみる積もりである。

旅館の横の小径を歩いていくと、春日神社の裏手に出た。神社(格は村社)には御食同(食偏に同)神事(ごとうしんじ、都無形文化財)という古式が残っており、氏神と氏子が同じ釜の飯を分け合って食べる行事である。祭神は天児屋根命(あめのこやねのみこと)で天岩戸で祝詞を奏して天照大神の出現を祈請した神である。神社を囲う瑞垣の石柱には吉野姓が多い。

春日神社から払沢の滝への入り口を過ぎ、北秋川橋を渡った先にある村立図書館に向かった。払沢の滝のバス停近くで、涼しい午前中の夏季補修授業の帰りなのか、中学生男女 4 名に出会って話を聴いた。村には小学校と中学校が各一校あるのみで、生徒数は小学生 50 名、中学生 26 名と極端に少ない。中学は各学年一クラスで 3 クラス、部活は陸上部と吹奏楽部のみ、通学はスクールバスでなく通常の私営バスである。「カフェせせらぎ」の主人は、終戦後の 24、5 年頃は戦後復興の山林需要もあって、村民は 6800 人程に増えたが、現在は 2000 人程に激減していると言っていた。役場の掲示板には、今年 7 月末現在 2039 人(男 1018 人、女 1021 人、1130 世帯)とあった。一世帯当たり 2 人にもならないのは、子供が村に残留しないことを示しており、素人目にも深刻な事態が窺知される。

図書館は北秋川橋を渡った橋の袂にある。残念だが、休館日である。建物は兜屋根造りで趣がある。踵を返して、払沢の滝入口のバス停向かいにある「手作りとうふの店ちとせ屋」でチーズケーキの代用として「うの花ドーナツ」を買った。



橘橋に戻ってきた。昼の時間は既に過ぎていたが、食べる場所が見つからない。漸く吉祥寺の駐車場向かい、南秋川べりにある「川魚料理、手打らあめん、たちばな屋」でらあめん(780 円)に存り付いた。窓から南秋川を覗いても樹木に覆われて見えず、瀬音が微かに聞こえるだけである。

門前まで来て寄らないのも悪いと思い、村一番の寺格である吉祥寺に寄ったところ、本堂前の大銀杏の木の下に 15 体の羅漢像を見つけ、羅漢様の個性豊かな姿態と表情に出会えたのは幸運であった。

灼熱の猛暑の中を一万歩近く歩いた。自然は滴る緑に覆われていたが、その中で心を和ませてくれた色彩があった。百日紅(さるすべり)の白色、薄紫、紅色の彩りである。五日市駅前の街路樹の百日紅、吉野邸の見越しの松に混じって立つ唯一本の紅色の百日紅、街道沿いの家々の庭に植えられた百日紅などが猛暑で鈍る感覚を刺激し心を和ませてくれた。

(了)

(注) 田部重治(たなべじゅうじ) 1884(明治 17 年)年富山生まれ、1972 年歿、東京帝大英文科卒、ワーズワース研究、法政大などで教鞭、北アルプス・奥秩父の先駆的登山で有名、山に関する著作多数